

2015.3.6.

(1)

おし図書館

No.175

発行
代表
青木 和子
松本市牧の原1-10-416
TEL 047-311-0886

片山元鳥取県知事の 講演を聴いて

イギリス在住 山本光子

「師走」というには気分的にまだ余裕がある12月21日(日)、千葉市で「図書館に関するフォーラム」があると聞き、出かけてみた。

以下、慶応義塾大学法学部教授(地方自治)片山義博氏による「まちづくりと図書館」と題された基調講演を聴いて私が思い至ったことを、会場の一場面を含めて書いてみた。

片山氏は鳥取県知事時代に、県幹部職員が県議会議員の質問に對する答弁をどのように作るのか

を訊いたところ、関連中央省庁から資料を送って貰って、それを参考に答弁を作成してありますという返事であったという。それでは中央省庁に都合の良い資料しか送られてこない。それで、県庁内で職員が使え、県議会での質問に對する答弁作成の助けにもなる図書資料室を作ることをご提唱した。ところが、職員から「それは無理です。資料を購入了り、それなりの広さのスペースを割いたりする余裕がありません」という返事が返ってきたという。それで「司書一人とその人が居られるスペースがあれば、それで充分」と言って作らせたという。

実際に彼が、世界的にみても優れているフィンランドの教育制度について資料を求めたところ、司書は、自分(片山氏)だったら到底拾い上げられなかったであろうと思われる、専門雑誌の小論文までを含めて資料を捜し出し、届けたという。このエピソードを聴いて、図書館に重要な要素は「箱物」(スペース)の大小でもなく、また保管する資料数の多寡でもなく、司書の存在であることに気がついた。私は改めて、自分が「図書館」をどうとらえているか、考えてみた。私にとっての図書館は今のところ、読みたい本や旅行先の情報、料理のレシピなどの資料を手に入る場所に過ぎない。それは、一時帰園中の松戸の図書館、葛飾区の図書館、居住地のイギリスの地元図書館でも、書架にあるか、タイトルがカタログに見られる「お蔵入り」の書籍・雑誌を借り出す

ことである。イギリスの図書館では、下宿でインターネットにアクセスが全く無かった時期にメールの受信・送信、一時帰国の航空券の購入を含め、のオンラインショップピングをしていた。今でもプリンターを持たない私は、プリントアウトが必要な時や、下宿でインターネットにアクセスできない時には、地元の図書館のWiFiを利用して図書館へ出掛けるが。

そして、私は自分で欲しいものを探し出して図書館を後にする。か、それは「自己満足」にすぎなかったと気付かされた。優秀な司書の方が有効に借っていたら、私が欲していた本・資料でも、私自身が見つし出し得たものよりも、もっと意味のあるものが見つかったかもしれないのだ。しかし、優秀な司書が、例えは、松々の図書館に居るかどうかが、分かりにくい。今一つ、私に分かっていないこ

とがある。「司書とは何か」ということである。フォーラムで度々使われた「情報のナビゲーター」という言葉は、私が「司書」とは何かを理解する上で助けになった。

が、「司書」が資格として、ある一定の科目の単位を取れば得られるのか、あるいは国家試験のようなものがあるのか、疑問がわいてくる。それに「司書」という肩書も、その資格を持つ者しか使えないのかということ。そうでもないらしい。国会図書館でも、事務方ではなく、図書館業務に関わる職員を「司書」と呼んでいるという。まあ、学業として専門の科目を学んでいなくても、図書館に勤務したこと、で、「司書」としての役目を優秀に果たしている人もいるだろうから、肩書が絶対必要というわけではないと思うが。

新装開館以来話題になって、いる佐賀県武雄市立図書館にコーヒーチェーン店スターバックスが出店したこと、「つたや」という本屋と図書館の中に入っていることについて触れた。本屋が図書館の建物の中に存るとなると、図書館に納品される本が、地元にある本屋から納品されるとは考えにくい。

かなり前の話になるが、私が以前住んでいたカシタベリーの図書館の本には、納入した本屋のラベルが貼ってあった。それは、図書館近くの路地裏の本屋であった。市民の図書館だったから市民と共にあるべきもので、地元のコーヒー店から客を奪い、地元の本屋から商売を奪うというのは、おかしいと思う。

片山教授が専門の地方自治の話をするために呼ばれて、図書館の話から始めると、聞き手は驚くという。今まではそこまで考えたこと

とはなかつた私だが、同氏の「図書館もまちづくりの一端を担うべきだ」という主張に、同感を覚えた。これも「フォーラム」に出席した成果であった。

最後に、会場の様子の一シーンに触れる。

私は、このような集会には、開始時間の5分前に会場に着くようにしている。今回も5分前に会場に入った。着いてみると、主催者側の予想を大中に上回る参加者数であったように、すでに会場の4分の3くらいまで椅子が並べてあるのに加えて、新たな椅子の列を作っているところであった。会が始まる頃には、それらの席は殆ど占められていて、会場案内後の数人の女性が、まだ空席になつてゐる椅子の位置を確かめていた。遅れてきた参加者は、すでに位置が確認されている空席に、静かに速やかに案内されていた。その会場

運営に、私は感心した。

第二部 シンポジウム

こいからのまちづくりを考える

パネリストは、片山義博、常

世田良(立命館大学教育学部教授)、高梨綾子(としよかんふれんず千葉市)、山室徳子(千葉市図書館非常勤嘱託職員)の

各氏。コーディネーターは、齋藤誠一氏(千葉経済大学短期大学部教授)。

山室氏は、図書館現場から見た千葉市図書館の現状を、高梨氏は「千葉市の図書館の発展は市民と共に」のテーマで、図書館協議会の公募委員としての経験を含めた話を、常世田氏は「図書館が日本を救う」図書館の可能性」のテーマで、自己判断自己責任型社会には確かな情報が必要不可欠なことや、図書館の役割の重要性などを話されました。

会のしめくくりとして、共催団体「としよかんふれんず千葉市」と「千葉市の公民館を考える会」の挨拶があり、熱気溢れるフォーラムは閉会しました。

なお、このフォーラムに寄せられた熊谷俊人千葉市長からのメッセージが紹介されました。

(青木和子)



第十八回

千葉県内図書館関係

市民団体連絡会

報告 青木和子

1月31日(土)PM.2:00~4:00、千葉市中

央図書館一階団体室で開催されました。参加は5団体(市原・君津・

佐倉・千葉・松戸)14名。担当は

「としよかんふれんず千葉市」。

始の千葉市中央図書館松尾館長の挨拶があり、図書館の将来像やあるべき姿を市民と共に考え、将来を見据えて示したいと話されました。

会の前半は、DVD「映像でみる戦後日本図書館のあゆみ」格子なき図書館（日本図書館協会）を鑑賞し、「としよかんふいんず千葉市」の石倉代表のお話を伺いました。

DVD 格子なき図書館

戦後、アメリカGHQ（連合国軍最高司令部総司令部）の日本占領政策の一環として、約400本のCIE（教育政策全般を所管する民間情報教育局）映画が作られ、「ナトコ映画」として、映写機と共に文部省に無償貸与された。

注 ナトコ…シカゴの映写機製造会社製の16mm映写機の通称。

多くはアメリカ製で、内容は、

アメリカの生活様式の紹介、日本人に民主主義や生活改善を啓蒙するものが主流だったが、此の映画は日本製で、戦後日本の図書館の変化を紹介している。かつての日本の図書館では、

利用者は先ず入館料を払い、開架書庫に収められた本を職員の手を介して閲覧した。やがて、書庫と利用者の間の「格子」が取り払われ、利用者は書架から自由に本を選ぶことが出来るようになった。本を手にする利用者の嬉しいな様子が印象的だ。また、アメリカの軍政府と交渉して払い下げられたトラックを使った移動図書館は、本だけでなく「ナトコ映画」をも乗せて各地を回り、上映会を開催したり、経験ある図書館員が読書相談にもなっていた。

この映画に取り上げられたのは、新潟県立図書館と、戦後ま

もなく開始された千葉県立図書館の移動図書館車「ひかい号」。図書館から遠い、山あいの集落まで本を運ぶ「ひかい号」と、その到着を楽しみにして待つ人々の姿が、とても印象に残った。

後半は、各団体からの報告。佐倉からは、本館を置かずに3館並立なので、司書の連携が難しいこと、複数のグループからは、図書館協議会があるからといって安心してはいられないことなどが報告され、千葉からは、市の実施計画に花見川図書館建設などが盛り込まれたという嬉しい報告がありました。

今回は7月4日(土)、図書館友の会きみフレ担当で開催予定です。

